

ぶらたなす

NO.3

水無月

(みなづき)

長井高等学校

図書委員会

図書館

2025.6.20

梅雨の読書

天候が変わりやすい6月に入りましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。この時期は室内にいる時間が増えるため、その時間を読書に活用してはいかがでしょうか。そこで、読書に集中できる方法について紹介します。まず、環境を整えてみましょう。照明は明るすぎず、目に優しい自然光や適度な照明を使用し、整理整頓された空間だと気が散らず、集中力を高めることができます。また、スマートフォンの通知をオフにして、読書の邪魔にならないようにすれば、本の世界を満喫することができます。他にも方法は様々ありますが、自分に合った方法で、今までよりも充実した読書時間を過ごしてみませんか。

(2-3 図書委員)

図書委員のおすすめの本

『ツナグ』

辻村 深月：著
新潮社

あなたがもう一度、会いたい人は誰ですか。一度だけ、逝った人との再会を叶えてくれるとしたら、何を伝えますか。一生に一度だけ、死者との再会を叶えてくれるという「使者（ツナグ）」。突然死したアイドルが心の支えだったOL、年老いた母に癌を告知できなかった頑固な息子、親友に抱いた嫉妬心に苛まれる女子高生、失踪した婚約者を待ち続ける会社員一。ツナグの仲介のもと再会した生者と死者。それぞれの想いを抱えた一夜の出会い、何をもたらすのでしょうか。

死んでしまっても誰かから想われる存在でありたい、そして大切な人には伝えたいことを後悔しないように伝えようと思わせる一冊です。

(2-3 図書委員)



図書館長より

押忍！ 図書館長です。今回紹介するのは、箕面在弘（みのお・ありひろ）の『自分のあたりまえを切り崩す文化人類学入門』（大和書房）だ。2ヶ月ほど前、所用で東京を訪れた際、立ち寄った丸善で本書にふと目が留まったのは、表紙の眼鏡っ子が可愛かったためばかりではない。「自分のあたりまえを切り崩す」という文句が、「論理国語」の授業で扱った見田宗介（みた・むねすけ）の『鏡の中の現代社会』を彷彿とさせたのだ。パラパラと捲ってみて、私には簡単過ぎるが、皆に薦めるにはちょうどいいと思い、蔵書に加えた。

……のだが、本稿を執筆するため精読したら、それは思い上がりだったと気付いた。確かに文章自体は平易なのだが、紹介される具体例が聞いたこともないものばかりで、大変勉強になった。特に秀逸だったのは、『「サザエさん」で喻えてみたらシリーズ』（命名・私）で、誰もが認める「純和風」な一家を用いて、インドのナーヤルのタラヴァートや、南スーダンのヌアーの女性婚・死霊婚・レヴィレート婚といった、我々に全く馴染みのない「家族と血」の在り方を説明するものだから、とても分かり易い一方で、異文化感が半端ない。

本書でも、『鏡の中の現代社会』でも、また、松村圭一郎（まつむら・けいいちろう）の『うしろめたさの人類学』でも、柳原望（やなはら・のぞみ）の『高杉さん家のおべんとう』でも、異口同音に語っているのは、現地（フィールド）の暮らしに参与することの重要性だ。実に多様な諸文化に対する知的な胸騒ぎと心からの敬意、そして、自文化を安易に否定せず、それでいて容赦なくその自明性を疑う眼差しは、無論インターネットでも、残念ながら図書館でも、安楽椅子に座ったままでは、決して得ることはできない。ナーヤルも、ヌアーも、そして私達も、この星の無数の塵の一つだということを、改めて思い知った。

それでも私は、日本の文化が一番好きだ。さて、この気持ちは、否定されるべきかな？